〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com
市立大町山岳博物館公式 Web サイトは、
大町山岳博物館友の会の支援により博物館が運用しています。

OMACHI ALPINE MUSEUM
市立 大町山岳博物館

山と博物館

「山と博物館」は、大町市役所および市内社会教育施設で、設置・配布しているほか、博物館公式 Web サイトからもご覧いただけます。

8月号
第 62 巻　第 7 号
2017 年

無 料
Free

もくじ

今月の１枚 …… １ページ
・ライチョウの雛が誕生しました
企画展特集 …… ２～３ページ
・「北アルプスの百年　百瀬慎太郎と登山案内人たち」のみどころ
博物館のひろば …… ４ページ
・青具で石油・天然ガス調査　・小学校青木湖キャンプ
・梅棹忠夫・山と探検文学賞授賞式
・日本動物園水族館協会中部ブロック飼育技術者研修会
・さく葉標本づくり講習会　・カクネ里現地調査　・人事異動

博物館施設案内
はこちら

ライチョウの雛が誕生しました

左：上野動物園の卵から孵化した雛（19日齢：体重105gと99g）
右：大町山岳博物館の卵から孵化した雛（８日齢：体重23.8gと24.7g）　７月10日撮影

宮野　典夫

ライチョウの生息域外保全は環境省の事業として日本動物園水族館協会に加盟している５つの施設（大町山岳博物館、東京都恩賜上野動物園、富山市ファミリーパーク、いしかわ動物園、那須どうぶつ王国）で繁殖に取り組んでいます。1園館だけの個体で繁殖を続けると遺伝的多様性が保たれなくなりますので、各園館での個体の移動が必要になってきます。ところがライチョウの雛や成鳥での移送実績がほとんどないため実施の方法やライチョウに対する影響はよくわかっていません。そこで受精卵での移動をすることになりました。受精卵の移動は、昨年と一昨年に乗鞍岳からの経験があるため安全な方法です。ただし、問題が一つあり、卵の時にはオスかメスかの判定ができないことです。各園館ではオスとメスの数に偏りがありますが、この方法だと偏りを解消するに至りません。

今年度の最初の移動として、６月15日に上野動物園から山岳博物館へ３個の卵が移されました。移動には携帯型孵卵器を用い、孵卵開始後17日目の卵を受け取り、６月21日に２羽が孵化しました。

一方、自園館で産まれた卵を自園館で人工孵化・育雛をすることで、来年以降の遺伝的多様性がより効率よく維持できるようになるため、この方法も取り入れています。

山岳博物館で産まれた卵からは最初に孵卵器に入れた４個から４羽の雛が７月２日に誕生し、現在２羽を飼育しています。

（市立大町山岳博物館 指導員）

山岳博物館　市民「無料」開放デー

博物館では、毎月第３日曜日（家庭の日）とその前日の土曜日を「大町市民無料開放デー」としています（これらの日については、大町市民以外の長野県民は団体割引料金でご覧いただけます）。８月は19日（土）と20日（日）です。

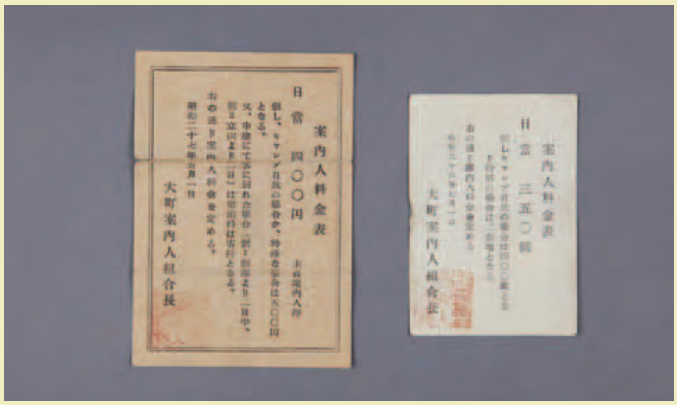
展示資料紹介（一部）　※全て当館蔵

▲ 百瀬慎太郎が意匠考案したと思われる手ぬぐい

慎太郎は絵も描きました。山、人、温泉風景、山と街のある風景など躍動感のあるスケッチが残されています。その時々の感動を、短歌と同様に描きとどめたものでしょう。

▲大沢小屋前に設置された百瀬慎太郎レリーフの複製（石膏着色）

1987（昭和62）年、大町山岳会により、針ノ木岳慎太郎祭30周年を記念して、大沢小屋前の岩に慎太郎肖像レリーフと略歴プレートが設置されました。



▲ 案内人料金表
左：1951（昭和26）年／右：1952（昭和27）年

大町登山案内者組合では、設立当初から案内人の案内料を定めていました。これは、登山者と案内人との料金をめぐるトラブルを避けるためでした。

▲ 案内人・西澤彰使用 カナカンジキ（三本爪）

近代登山の夏山では、雪渓歩きに用いられました。

▲ 案内人・櫻井一雄使用 てぶ皮（カモシカ毛皮製）

手袋。主として狩猟時の防寒具として用いられました。

▲ 案内人・平林高吉使用　大町登山案内者組合の印半纏

大町登山案内者組合の組合員が揃いで着た紺木綿製の印半纏（しるしばんてん）。襟には「日本アルプス」「大町口案内者」と染め抜きされています。

おわりに

グリーンシーズンから紅葉シーズンにかけての信州への観光の折に、あるいは夏山・秋山シーズンの北アルプス登山の行き帰りの際に、本展をご高覧いただき、後立山連峰の麓、“岳”のまち・大町市ならではの「山岳文化」にふれていただければ幸いです。

なお、本展の開催にあわせ、展示内容を詳しくまとめた展示解説書（部数限定、体裁：A4判・カラー37頁、価格500円）を編集・発行します。ご希望の方は当館ミュージアムカフェ・ショップ「もるげんろーと」にて販売予定ですので、ぜひお買い求めください。

（市立大町山岳博物館 学芸員）

企画展特集

「北アルプスの百年 百瀬慎太郎と登山案内人たち」のみどころ

会期：8月5日～11月26日

関　悟志

はじめに

大町登山案内人組合は1917（大正６）年、百瀬慎太郎が主唱して大町で設立されました（設立当時は大町登山案内者組合）。これは当時、増加する登山者の要望に応えるとともに地元山案内人の資質向上を目指してのことで、こうした動きは全国に先駆けてのことでした。

本展では、同組合ゆかりの写真や品々を展示。今年創立100周年を迎える同組合の足跡とその存在を全国に発信するとともに、大町市周辺山域の山の魅力をご紹介します。

ここでは、展示のみどころとして、各展示コーナーの概要と、展示資料の一部をご紹介します。

なお、この企画展は、大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会との共同企画展として開催します。

大正登山ブーム

大正時代になると、信仰や仕事ではなく、自由な意思と行動にもとづいて登ること自体を楽しみ価値を見出す登山、いわゆる近代登山が国内で隆盛となります。地形図の発行、鉄道など交通機関の発達や山小屋の建設、登山案内人組合の結成などが影響し合い、登山を取り巻く環境が整備され、北アルプスでは夏山登山者が急増し、いわゆる大正登山ブームを迎えます。

對山館と百瀬慎太郎

百瀬慎太郎は、大正期から昭和初期まで、信濃大町の旅館「宁(ヤマチョウ)旅館」（通称・對山館）の主人として、北アルプスへ向かうため旅館に宿泊した登山者らに必要な物資を調達したり、大町登山案内者組合を設立（1917年）して登山案内人を手配したりして、登山に関する利便や安全面でのサービスを提供しました。さらに、大沢小屋（1925年建設）と針ノ木小屋（1930年竣工）を開設して針ノ木岳周辺の登山環境整備を進め、この地域における近代登山の発展に貢献しました。一方、自身も登山を愛好する岳人であるとともに、短歌を詠み随筆を綴る文人でもありました。

▲登山者（左端）を送り出す百瀬慎太郎（左から２人目）と荷を担ぐ登山案内人たち　昭和初期 對山館前にて【個人蔵】

大町登山案内者組合と登山案内人群像 結成 ― 登山ガイドグループの先駆け ―

大町登山案内者組合は結成の1917（大正6）年から1943（昭和18）年の旅館・對山館廃業頃まで、事務所を對山館内に置きました。結成当初の組合の性質は、百瀬慎太郎いわく“山に通じた人間達の「隣りづきあい」といったもの”であったといいます。

ここでいう組合とは、同職業者の集団という意味合いであり、大町登山案内者組合は、日本の近代登山における登山案内人という山岳ガイド集団としては最初に団体組織されたもので、その設立は画期的でした。すなわち、全国の霊峰で登拝者を先導したり、場合によっては登拝者の荷を一部背負いながら先導・引率したりした同行者たちの集団とは一線を隔すものであったといえます。

誕生の舞台裏

大町登山案内者組合の設立以前から、当然ながら慎太郎は對山館の宿泊者に乞われれば、登山支度を調達するとともに信頼に足る登山案内人を紹介していました。これは對山館には父・金吾から続く案内人紹介の実績があり、慎太郎自身も案内人たちと山行を共にし、その力量を把握していたということです。

大正時代に入って登山に関わる諸環境が整いはじめると登山者は増加し、登山案内人の需要も高まりました。しかし、北アルプス北部周辺の山域を網羅する案内能力が備わった大町の案内人は限られており、もはやその需要と供給の均衡はくずれ、慎太郎は案内人の人員確保と彼らの案内能力向上の必要性が急務であると感じていたものと思われます。

▲学生登山者と登山案内人たちの出発風景 1918（大正7）年頃　對山館前にて　　後列右から５人目は百瀬慎太郎　【個人蔵】

戦中・戦後、そして平成へ ― 現在につながる思い ―

日中戦争・太平洋戦争が始まると、山からは登山者の姿が徐々に消えていきました。戦後、ようやく山に登山者がもどりはじめた矢先、1949（昭和24）年に百瀬慎太郎がこの世を去ります。組合長として采配をふるってきた慎太郎亡きあとも、大町登山案内者組合が存続されることが、その年のうちに決定されました。昭和30年代以降、登山スタイルの移り変わりから、登山案内人たちも近代的ガイドへと変わっていきました。その後、平成に入り「大町登山案内人組合」に改称し、その活動は現在にいたります。今年2017（平成29）年、大町登山案内人組合は、登山ガイドグループの先駆けとして、創立100周年の大きな節目を迎えました。

博物館のひろば

つぎの方は、年間を通じて博物館の観覧料が無料です。
・大町市内在住の 65 歳以上の方
・大町市内の小学校・中学校に通う児童・生徒の方
（入場の際、受付にてお名前等をご記入ください）

青具で石油・天然ガス調査

平成29年７月７日（金）

美麻小中学校の総合的な学習の時間に、７学年の研究テーマとして、青具の石油・天然ガスが取りあげられています。

かつて青具では、天然ガスでお風呂を沸かしていたことに興味をもち、調査が始まりました。

草やぶの地面を掘るとかすかな石油臭がする土があり、深く掘ると臭いがすこし強くなりました。土を学校へもちかえって、色や性質を調べることになりました。

小学校青木湖キャンプ

平成29年６月15日（木）・28日（水）・７月６日（木）・11日（火）

パネルや実物を示しながら、面白おかしく実施させていただいている「青木湖なぞ解きウォークラリー」を今年も６月15日（大町西小学校）・28日（松川小学校）・７月６日（池田小学校）・11日（大町北小学校）に提供させていただきました。

このプログラムは、青木湖のでき方やすんでいた縄文人、周辺に生きる動物を知り、最後は便利になった私たちの生活と引き換えとした自然を紹介して、考えていただく内容としています。

当館では理科・社会・総合的学習などの連携事業を実施させていただいています。プログラムのお問い合わせ、事業実施などご相談に応じます。

梅棹忠夫・山と探検文学賞授賞式

平成29年６月３日（土）

６月３日、長野市で開催された授賞式に、大町市長と館長が出席しました。

同賞は、山岳に大変造詣があった故梅棹忠夫氏を偲び、平成24年に創設され本年６回を数えましたが、創設の折には当館も深く関わりました。

本年度は、筑波大学教授でロシア政治を研究される中村逸郎さんの「シベリア最深紀行」が受賞しました。

式の後には、「辺境シベリアから見えてきたロシアの今」と題して、同氏の記念講演も開催され、中央の権力が及ばないシベリア辺境の人々の営みを、リアルにお聞きすることができました。

日本動物園水族館協会中部ブロック飼育技術者研修会

平成29年６月29日（木）～30日（金）

本年度の中部ブロック飼育技術者研修会が、愛知県江南市の「すいとぴあ江南」を会場に標記の日程で開催されました。

中部ブロックの各園館から37人の飼育員らが集まり、日頃の動物飼育から得た研究成果や情報交換が行われました。多忙な動物飼育の合間を利用して、各人が課題をもって動物の置かれた環境や飼育方法などの改善に向け取り組む姿に触発されることも多く、自館への取り組みに活かせればと思います。なお来年度は、当館が同研修会の開催地となります。

さく葉標本づくり講習会

平成29年５月21日（日）・７月１日（土）実施

標本は、地域の自然を理解する上で重要な資料であり、また証拠となり得るものですので、博物館の業務のなかでも収集保管はとても重要な位置付けとなります。

２回の講習では、藤田淳一さん（長野県植物研究会）を講師に、高知県立牧野植物園の収集保管が一般の方の参加により支えられている事例や、実際に野外で採集した植物の標本作製、ラベル標記について学んでいただきました。

当館においても講習を重ね、一般の方が博物館の収集保管に参加できる環境を整えていきたいと考えています。

カクネ里現地調査

平成29年６月９日（金）～12日（月）

【雨中での撮影のため水滴で部分的にボケあり】

着手から４年目となったカクネ里雪渓学術調査は３月末に調査団は解散し、本年度は山岳博物館と信州大学による共同研究の形で、残された地形地質に関する調査を行うこととし、標記の日程で現地調査を実施しました。

今回は大量の残雪にも助けられ、当初の目的を無事に果たす事が出来ました。

人事異動

動物系学芸員の佐藤真さんは、２年３ヶ月お勤めいただきましたが、一身上の都合により６月末をもって退職されました。

編集・発行
市立大町山岳博物館 OMACHI ALPINE MUSEUM
―創立 1951 年―

〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館　編集責任者　鳥羽章人
TEL. 0261-22-0211　FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com

8月号
第 62 巻　第７号
2017 年

発行日　2017（平成 29）年７月 25 日

印　刷　有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
TEL.0261-22-3030　FAX.0261-23-2010